

SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★

レザボア・ドッグス デジタルリマスター版

1992年／アメリカ映画

配給：鈴正、フラッグ／99分

2024（令和5）年1月13日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

2024-9

監督・脚本：クエンティン・タランティーノ
出演：ハーウェイ・カイテル／ティム・ロス／クリス・ペン／スティーヴ・シェミ／ロレンス・ティアニー／マイケル・マドセン／エディ・バンカー／クエンティン・タランティーノ／カーク・パルツ

みどころ

これまでわずか8本の監督作品で巨匠となり、しかも、「10本で引退する」と宣言する鬼才・クエンティン・タランティーノは既に『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』(19年)という伝記映画まで作られている。そんな彼が28歳で脚本を書き、出演もした監督デビュー作が、約30年ぶりにデジタルリマスター版で復活！こりや必見！しかし、このタイトルの意味は？

『キル・ビル Vol.1』(03年)はわかりやすかったが、「ライク・ア・ヴァージン」の曲の解釈から始まる本作は、俳優の名前と顔が一致しないうえ、時間軸を自由自在に操ったストーリー構成は、宝石強盗の（失敗の）物語だとわかるものの、理解しづらい。次々と流れてくる劇中歌も、知っている人にはスタイルリッシュだろうが、私にはサッパリだ。

失敗の原因は内部に裏切り者がいたからだ。そんな声が出る中、“鉄の結束”など存在しない“掃き溜めの犬たち”的疑心暗鬼ぶりとその広がりは？その結果訪れてくる、タランティーノ流のラストの血で血を洗う惨劇とは？

■■タランティーノ28歳初監督作品が30年ぶりに公開！■■

クエンティン・タランティーノ監督と聞けば、私はすぐに『キル・ビル Vol.1』(03年)『シネマ3』(131頁)を思い出しが、『イングロリアス・バスターズ』(09年)『シネマ23』(17頁)、『ジャンゴ 繋がれざる者』(12年)『シネマ30』(41頁)、『ヘイトフル・エイト』(15年)『シネマ37』(40頁)も素晴らしい作品だった。そんな彼も、『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』(19年)『シネマ53』(89頁)と題された“伝記映画”が公開されるほどの“巨匠”に急成長！もっとも、90歳の山田洋次監督の『こんにちは、母さん』(23年)『シネマ53』(211頁)が第90作目となったことに比べると、タラ

ンティーノ監督は28年間の監督生活の中で作品数はわずか8本だし、「10本撮れば引退する」と公言しているから、その違いは大きい。そんな彼が28歳の時に脚本を書いたうえ、監督・出演をしたデビュー作が本作で、本作は『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』でも取り上げられていた。しかして、なぜか今、謳い文句を「現代の映画は“ここ”から始まった。裏切り、信頼、忠誠が交錯する史上最高のインディペンデント映画、30年ぶりに劇場公開」として、30年ぶりにデジタルリマスター版が公開されたので、こりや必見！

■■本作誕生のいきさつは？タイトルの意味は？■■

織田信長のように、大名の子として生まれ、順調に上り（勢力拡大）していく人物も例外的にはいるが、木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）をはじめ、“成功者”となった人物のほとんどは“下積み”的経験を持っている。それはタランティーノも同じで、28歳当時の彼は脚本を数本執筆したもの、監督への道筋は全く見えていなかつたらしい。しかし、ウィキペディアの「作品解説」によると、

若手製作による映画への積極的な助力で知られる俳優のハーヴェイ・カイテルが、タランティーノの自主制作短編『Reservoir Dogs: Sundance Institute 1991 June Film Lab』（1991年）を気に入り製作総指揮を申し出、カイテル本人の出演を含めたハリウッドでの本格的なリメイクが実現した。脚本はタランティーノが3週間半で書き上げた。

らしい。また、

当時、28歳であったタランティーノにとって初めての長編監督作品となった本作は、特別招待作品に選出されたカンヌ国際映画祭では「心臓の弱い方は観賞を控えてください」との警告が発令するほど暴力描写が残酷でありながら、緻密な人間描写と時間軸を巧みに操った構成、さらに主題歌であるジョージ・ベイカーの『リトル・グリーン・バッグ』に代表されるスタイリッシュな劇中音楽が高い評価を得てカルト的な人気を博した。

そうだ。さらに、

製作費90万ドルという低予算で作られた映画のため、多くの俳優は私服を着ている。

そうだ。

他方、本作のタイトル『RESERVOIR DOGS』（レザボア・ドッグス）って一体ナニ？『RESERVOIR DOGS』は一応「掃き溜めの犬たち」と翻訳されているが、ウィキペディアの「題名の意味」を読むと「“Reservoir dogs”という題名は英語を母国語としている者にとっても意味が曖昧であり、特定のスラングでもない」らしい。そのため、タランティーノ監督がなぜそんなタイトルにしたのかについては、①reservoir(酒の貯蔵庫・酒場)に群がる犬(不良)から「たまり場の男たち、盛り場の不良ども」という意味であるという説、②ギャングの集団のアジト(=reservoir)からスパイを探し出す映画だから、“reservoir dogs”とはネズミを追いかけ回す走狗であるという説、③タランティーノがフランス映画

『さよなら子供たち』の原題 “Au Revoir Les Enfants” を上手く発音できず “Reservoir Dogs” と呼んでいた事があり、それをサム・ペキンパーの映画『“Straw dogs(邦題：わらの犬)』と結びつけたという説、④聞こえの良い単語を繋げただけで意味は無いとする説、等の諸説があるらしい。それはきっと、彼が 10 本目の監督作品を撮り終わり、引退会見をするときに明らかにされるだろう。

■口■劇中音楽の数々に注目！私にはよくわからないが・・・■口■

人生は誰でも平等に、時間軸通りに流れていく。また、そのエンドも平等に、最長 100 年程度と決まっている。しかし、映画は便利な芸術だから、時間軸を過去でも未来でもどこにでも設定できるうえ、1 本の映画の中で自由に移動させることができる。本作の脚本を書いた 28 歳のタランティーノの才能が高く評価されたポイントの 1 つが、本作における時間軸の使い方の巧みさだ。

本作のストーリーの核は、裏社会の大物ジョー（ローレンス・ティアニー）が宝石強盗を計画し、息子のエディ（クリス・ペン）と共に集めた 6 名の実行犯と共にそれを実行することだ。しかし、そのスタートとなる、ジョーが参加者一人一人にコードネームを授けるシークエンスが登場するのは、冒頭ではなくずっと後になる。本作冒頭は、テーブルの周りに座った黒ずくめの男たちが、『ライク・ア・ヴァージン』の曲について、それぞれの“解釈”を披露するシーンだ。そこには、タランティーノ特有のどぎつい言葉（スラング）がたくさん登場するし、そこで語られるさまざまな解釈についても、何の基礎知識もない私にはサッパリわからない。

年末年始に TV で見た（聴いた）「昭和歌謡」の数々や、先日亡くなった谷村新司や八代亜紀の楽曲等の解釈についての会話なら、私はそのほとんどを理解できるし、場合によればその会話に参加もできる。しかし、タランティーノ扮するミスター・ブラウンが蘊蓄を語る『ライク・ア・ヴァージン』の解釈については、ただ黙って聞く他ないうえ、その内容はほとんど理解できない。その他、宝石強盗のためにジョーの下に集まった、いわく因縁ありげな 6 人の男たちはいずれも音楽好きらしいから、スクリーン上にはさまざまな劇中歌が流れるが、そのほとんどを私は知らないから残念。逆に、これらの劇中歌をいくつかでも知っている人にとっては、本作の興味はより深まるはずだ。

■口■なぜ現場に警官が！内部に裏切り者が？それは誰だ！■口■

WEB サイト「映画ナタリー」によると、本作は「1992 年にサンダンス映画祭で初上映されると斬新な構成と過激なバイオレンス描写が注目の的に。カンヌ国際映画祭では、ポスターやチケットに「心臓の弱い方はご遠慮ください」というステッカーが貼られ、上映がスタートすると途中退場者が続出したこともあり話題をさらった。」そうだ。また、「公開された特報にはオープニングシーンを収録。「映画史に取り返しのつかない衝撃を与えた最も偉大な一作！」という文字も映し出された。」そうだ。

しかし、本作でホワイト、ブラウン等のコードネームを付けられた男たちは、タランテ

イーノを除いて全員私の知らない俳優だから、名前と顔が一致しない。しかも、本作は時間軸を自由自在に動かしていくから、ストーリーの把握が難しい。年末年始にBS12で見た高倉健主演の『昭和残侠伝』シリーズ全9作は俳優陣の名前と顔が一致するうえ、ストーリーが時系列に沿って進んでいくし、核となる物語も想定内のもの。さらに、結末にやってくるクライマックスのパターンも決まっているから、わかりやすかった。

それに比べると、本作のストーリーの把握は大変だが、ストーリー展開の軸は、①なぜか宝石強盗の現場に多くの警官がいたこと、②そのためミスター・オレンジ（ティム・ロス）は腹部に銃弾を受け、瀕死状態で集合場所とされている倉庫に担ぎ込まれたこと、③失敗の原因は、きっと内部に裏切り者がいたからだが、それは一体誰だ？というもののだ。他方、本作は『昭和残侠伝』シリーズと同じように、ジョーをはじめ、コードネームで呼ばれる宝石強盗実行犯たちのキャラが明確にされているから、名前と顔が一致しなくてもストーリー展開の緊迫感はリアルに伝わってくる。そして、本作後半になってからは、ミスター・ブラウン（ケンティン・タランティーノ）に誘拐された若い警官マーヴィン・ナッシュ（カーク・バトル）への拷問シーンの中で、「誰が裏切り者だったのか？」、つまり、ロサンゼルス警察側から言えば、「誰を潜入捜査官として強盗団の中に潜入させていたのか？」が明らかになるので、その展開の中で見るバイオレンスぶりと、これぞタランティーノ流とも言うべきラストの血で血を洗う惨劇は、あなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年1月17日記